映画「ともだち」について

友松あきみち

全国各地の幼稚園に関する新聞報道記事が日々幼教の事務局に送られ、明に集められています。秋には研究集会などに関することは多く、年末から新春にかけては入園についての記事が多い。特に入園期の新聞報道には幼児保育の問題が散見される。大新聞でさえ地方末にいかにもゆるなるべきか争いがある。幼稚園は教育問題としてとらえられているだけに、いつも私幼が保育界の高調さを代表して皮肉られるのだろう。今度は幼考でつくった教育映画「ともだち」もその意味では、しばしばジャーナリズムにP.R.を賑わい母園の映画と言われているそうだ。

しかし数ある私幼の中には問題をもつ園があることはあろうが、最近のように組織がたまっていると、衆は賛否で団体化される。それにしても身近な教育についての研究が必要である。全国理事会や常任理事会では、あくまでも一般の知識が不十分である。この映画が制作されると、意図による保育の意義を必要性が理解されるたために、その重要な立場で今一度幼稚園教育について考え直す機会を持つことができる。映画でなければ製作する意味も半減するわけであった。

製作の責任は日幼の広報委員会が受持つことになったが、松村康平、石井哲夫氏をはじめ広い分野から有能な人々に参加していただいたがなかなか長い討議の時期を持っている。できればシリーズとしてつづけていきたいので、保育の中で先ずどのような面に重きを置くかが大事な最終の課題であった。委員会
の空気は全国委員会の要請もあるので、幼稚園教育の使命を再認識するという意味でも集団生活と幼児の成長という点に注
焦点をのばす保育をとりあげることが流行している。そのこと
はとりもなおさず人間形成ということが結びつけて幼稚園教育
の真の意味を考えることになって来ているのが実際には文章
で伝え得るものには限界があった。はっきり言えよう、ここには
生の保育が少ないからである。

子どもと子ども、あるいは保育者、教師が毎日の生活の変化
の中でどんな心のふれ合いをもって教育をすすめていったらよい
のか、このことは、たとえ一日をある園でうごくふさぎに参観
したところで、よく納得できるわけではない。映画「ともだ
ち」その意味で現場の先生方に大きな示唆をあたえる結果に
なっている。学習期間というよりも、いつでもない生活の
場で、幼稚園教育のねらいと教師の役割がはっきりと具体的
に示されているからである。

岩波映画製作をおまかせすることに決定し、演出が始まる
ときまつてから、どの園でどんな角度から撮るかというこ

とがすなわちこの映画の価値を決定することでもあった。候補
としてはかなり多くの園が決められたが、平凡な園であるこ

と、それは設備の上でも園児の家庭層についても一般人ほどと
より全国の現場の先生方に抵抗を与えぬことが必要であった。

そして結局は撮影に比較的便利な園であるところ、演出の中
史とうまの合う現場であることとなることになったのである。東
京黒の平塚幼稚園にこよ努いいただくことになったのであろう。

映画はその点何の作意もなく、こく自然に私立幼稚園の一つの
園をとりあげたにすぎない。

やがてこの映画は海外版も作製されて、日本の幼稚園教育の
一面を外国の人々に理解していただく一助ともなるであろう。

その時この映画が立派に総合的な批判にも耐える教育的内容
を紡いでいることを日私幼の組織は確信している。私もこの
映画をすでに何回か見おおしているが、その都度かが園の保育
についても反省し、幼児の成長に対する理解を深まっていくこ
とを感じている。ただ、映画の献身的な努力によってできた
ということはこの機会に記録しておきたい。